女子が男子のおちんちんの皮を剥きヨシヨシと撫でた第二次性徴検診

某公立中学の2年B組の話。西野健太、14歳の平凡な少年は、窓際の席で頬杖をつき、グラウンドでサッカー部が白いユニフォームでボールを追いかける姿をぼんやり眺めていた。隣の席では、クラスメイトの斉藤弥奈が、長い黒髪を指でくるくると巻きながら、

数学のノートにペンを走らせていた。彼女の整った顔立ちは、教室の喧騒の中でひときわ目立ち、柔らかな唇が時折動くのが健太の視界の端に映った。

「健太、今日の保健の授業、なんか変な噂聞いてない？」

弥奈が突然顔を上げ、健太に囁いた。彼女の声は低く、好奇心と不安が混じっていた。

「なんか、ペアで…変なことするって、女子の間で噂になってるの」と彼女は声をさらに小

さくし、頬にうっすら赤みが差した。

「噂？ いや、別に…ただの健康診断だろ？」健太は肩をすくめ、気楽に答えたが、胸の奥でざわつきを感じていた。朝のホームルームで担任が告げた「性徴発達検査」という言葉が、教室に奇妙な緊張を走らせていたことを思い出した。誰も詳しい内容を知らず、「保健室でペアになって行う」とだけ聞かされていた。「変なことって…何だよ？ 身体測る

だけじゃね？」彼は笑いながら言った。

「なんかさ…身体をチェックするのに、ペアで…その…」弥奈は言葉を濁し、唇を強く噛んだ。彼女の瞳が床に落ち、長い睫毛が揺れ、頬の赤みが濃くなった。「恥ずかしいことするんじゃないかって。女子の間で、めっちゃ話題になってるの」彼女の声は囁きに近く、指がスカートの裾をぎゅっと抓み、布がピンと張って小さな皺ができた。健太は「まさ

か」と笑い返したが、胸の奥で不安が膨らんだ。健太は深呼吸し、弥奈の緊張した横顔を見ながら、「まあ、行ってみなきゃ分かんねえよ」と呟いた。

教室の後ろでは、佐藤悠斗がバスケ部の仲間と笑いながら話していたが、声にどこか落ち着かない響きがあった。長身でがっしりした体格の彼は、普段は自信満々だが、今日の授業の噂を聞き、眉を寄せていた。「おい、太郎、なんかヤバい検査らしいぜ」と囁

いた。山田太郎は、クラスのムードメーカーで、明るい性格。「マジかよ、めっちゃ恥ずいんじゃね？ 裸とかになるんじゃね？」と笑いながら答えた。隣の高橋美咲は、ショートカットの髪を指でいじり、教科書をじっと見つめていたが、肩が微かに震えていた。田中美優は、ピンクのネイルを光らせながら、スマホをいじっていたが、時折視線を上げ、教室のざわめきを見渡した。「ねえ、愛美、ほんとに変な検査

だったらどうする？ 私、絶対やだよ」と美優が囁くと、中村愛美は栗色の髪を耳にかけ、「怖い…やだよ、絶対」と小声で答えた。愛美の大きな瞳が揺れ、唇を噛む仕草が緊張を表した。

保健室の重い扉をくぐると、教室の温もりが一瞬で消え去った。健太は体育座りで床に座り、膝を抱えた。隣には弥奈が同じ姿勢で座り、長い黒髪が肩を越えて背中に流れ、蛍光灯の光を受けて艶やかに

輝いていた。弥奈の瞳は床に落ち、長い睫毛が揺れ、頬に赤みが広がっていた。「健太…なんか、怖いね、これ」と彼女は囁き、唇を軽く噛んだ。健太は「大丈夫だって、すぐ終わるよ」と呟いたが、声に力はなく、額に汗が滲んだ。

保健室には、健太と弥奈のほか、悠斗と美咲、太郎と美優、翔と愛美の4組のペアがいた。悠斗は膝を抱え、長身の体を縮こませ、床を見つめていた。美咲は小柄な身体をし

ていて、ショートカットの髪が耳元で揺れ、唇が震えていた。太郎は膝を立て、指でズボンの縫い目をなぞっていた。美優はピンクのネイルを光らせ、髪をかき上げる仕草を繰り返したが、指が微かに震え、ネイルが蛍光灯の光を反射した。翔は眼鏡の奥で視線を床に固定し、耳が赤くなっていた。愛美は栗色の髪を耳にかけ、大きな瞳が揺れ、唇を噛んでいた。彼女の肩が震

え、ブラウスが胸の動きに合わせて軽く揺れた。

「では、これから性徴発達検査を始めます」保健医の笠井先生の声が、静寂を鋭く切り裂いた。40代半ばの女性で、白衣の袖をまくり、眼鏡の奥の目は感情を一切読み取らせなかった。「各ペアで、まず男子から始めてください。男子は全裸になり、女子は指示に従ってください」

保健室全体が凍りついた。健太の心臓がドクンと跳ね、額

に冷や汗が滲んだ。手のひらが汗ばみ、指先が冷たくなった。弥奈の指がスカートの裾をさらに強く抓み、膝が内側に寄り、布がピンと張った。
「マジで…全裸？ こんなの…ありえないよ」と彼女の声は震え、瞳が一瞬健太を捉えた後、床に戻った。長い睫毛が揺れ、頬が赤く染まった。「健太…これ、どうするの？」彼女は囁き、唇を強く噛んだ。悠斗が「え、先生、冗談ですよね？全裸って…マジすか？」と声

を上げ、普段の自信が消え、声が上ずった。笠井先生は無表情で「学校の方針です。従ってください」とだけ答えた。美優が「うそ、めっちゃ恥ずいんだけど！ 裸とか、ありえないじゃん！」と笑いながら言ったが、声の裏に緊張が滲み、ネイルが光る指が髪を強くかき上げ、髪が乱れた。愛美は無言で唇を噛み、瞳が床に落ち、肩が震えた。翔は「こんなの…無理っすよ」と小声

で呟き、眼鏡の奥で耳が真っ赤になった。

健太は立ち上がり、深呼吸した。膝が軽く震え、床の冷たさが靴底を通じて伝わった。靴を脱ぎ、靴下がビニールタイルに触れると、冷たい感触が足裏に広がった。ブレザーのボタンを一つずつ外し、指が震え、ボタンが硬く感じられた。布が擦れる音が耳に響き、ブレザーを肩から滑らせ、椅子の背に丁寧に掛けた。肩を滑る布の感触が肌に残り、

静電気がパチッと鳴った。ワイシャツのボタンに手をかけるが、指が震え、最初のボタンが引っかかった。ようやく外すと、襟が首筋に擦れ、微かな摩擦音が聞こえた。シャツを脱ぎ、腕を抜く際、布が肌を滑り、汗で湿った肌に張り付いた。Tシャツを頭から抜くと、髪が乱れ、首筋に汗が一筋流れた。心臓が速く鼓動し、羞恥が全身を駆け巡った。弥奈の視線が一瞬健太の胸に落ち、すぐに逸らされた。彼女

の頬が赤くなり、唇を強く噛み、指がスカートの裾をぎゅっと抓んだ。「健太…マジで脱ぐの？ こんなの…恥ずかしすぎるよ」と彼女の声は震え、長い睫毛が揺れた。健太は「仕方ないだろ…学校のルールだし」と呟き、ズボンのベルトに手をかけた。金属のバックルが冷たく、指先に触れた。ゆっくりベルトを緩め、濃紺のズボンを足元に落とす。膝で引っかかり、バランスを崩しそうになりながら、足首から抜いた。

ズボンが床に落ち、カサッと音を立て、椅子の背に掛けた。

ボクサーブリーフ一枚の姿で、健太は息を呑んだ。手のひらが汗ばみ、指先が冷たくなった。弥奈の視線が一瞬下に落ち、すぐに床に戻った。

「健太、ほんと…大丈夫？めっちゃ緊張してるみたい」と彼女の声は励ますようだったが、震えが隠せなかった。健太は下着の端に指をかけ、意を決して下ろした。布が太もも

を滑り、足首に落ち、おちんちんが弥奈の前に晒された。